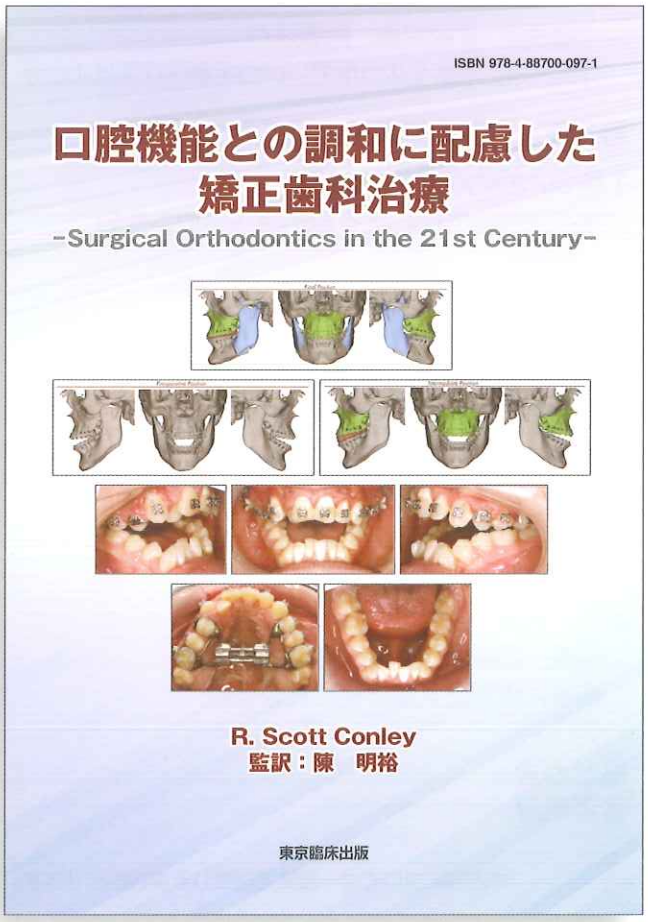
外科的矯正手術か成長コントロールケースなのかー。

口腔機能との調和に配慮した矯正歯科治療

-Surgical Orthodontics in the 21st Century-

R. Scott Conley
監訳：陳　明裕



近年外科的矯正治療の件数が増え、矯正歯科治療時にはこれまでにも増して口腔機能への配慮が必要とされるようになってきた。

本著は「矯正治療における診断」「治療計画と治療の実際」「外科的矯正治療の実際と問題点」の三部構成。

第1部では審美面と機能性の調和のとれた診断のために必要な、CTや3Dデジタルなどのニューテクノロジーの知識や応用法、術後のクオリティーコントロール、成長予測・評価法など、手術か成長コントロールだけでの対応ケースかを実際の症例を交えながら説明。

第2部では治療の実際について、矯正歯科医なら悩んだことがあるであろうという症例を解説。

第3部は「Surgery Firstの検証」や「顎関節症状への対応」「気道の変化」など外科的矯正治療後の問題点として議論されることが多い内容について詳述している。

著者は長年ミシガン大学でMcNamara先生らとともに口腔機能について研究し、この分野で多くの研究を発表してきた、まさに第一人者である。

著　者：R. Scott Conley
監　訳：陳　明裕
規　格：A4判、フルカラー、176ページ
発　行：東京臨床出版株式会社
発　売：株式会社 JM Ortho
〔定　価〕6,600円（本体6,000円＋税）

※表紙など、内容については一部変更が生じる場合があります。

(株) JM Orthoまたはお出入りのディーラーまでー。

矯正歯科治療と口腔機能の最適なバランスを目指して―。

はじめに
推薦の言葉
序文

第1部　矯正治療における診断

1章　審美性と機能の調和
外科的矯正治療の現状
矯正治療後の審美性と口腔機能との調和への配慮
コンピューター支援顎矯正施術シミュレーション（CAOS）の利点
2Dアナログと3D デジタルによるアプローチの違い
術後のクオリティーコントロール

2章　診断へのニューテクノロジーの応用
悪い結果につながる可能性のあるエラーを理解する
失敗例から学ぶ
なぜ毎月のアポイントメントが必要なのか
診断と術前治療の両方でミスを犯したケース
最適な矯正治療計画のために必要な資料
異常嚥下癖が開咬を生むのではない
イメージ画像による評価
頭部X線規格写真：診断および治療計画立案の支援

3章　成長への配慮
成長を予測・評価する
手の骨成熟度は思春期における身長の最大成長に関連する
成長を利用してできること・できないこと
症例1／症例2
兄弟姉妹との比較による治療法の検証
症例3

第2部　治療計画と治療の実際

1章　カモフラージュ治療か包括治療か
治療オプションと治療計画達成のためのメカニクス
症例／カモフラージュアプローチ／外科的アプローチ／治療アプローチの全体的な評価のまとめ
治療目標がどのようにして達成されたか

2章　非対称症例への対応法
歯槽性と骨格性
非対称のEtiology
診断に役立つ重要な要素
1. 臨床検査／2. 模型分析／3. イメージング手法／4. 骨シンチグラフィーと3D定量SPECTスキャン
非対称性の分析

3章　外科的矯正手術の治療計画
1回法か2回法か
ユニプラナー補正／マルチプラナー補正
片顎のみの手術で達成できる治療の例
症例1：Ⅱ級症例、片顎オペ／症例2：Ⅲ級症例、片顎オペ
立体的・多平面的外科手術を必要とする例
症例3：Ⅲ級症例、両顎オペ
外科的矯正治療全体の中で、いつ手術を行えばよいか

第3部　外科的矯正治療の実際と問題点

1章Surgery First の検証
矯正治療の既往のあるSurgery First 症例
症例1
Surgery First を用いやすいケース
症例2

2章　顎関節症状への対応
顎関節に問題のある症例での注意点
治療中に進行性下顎吸収が疑われた症例
症例1
顎関節全置換術症例
症例2

3章　気道の変化
咀嚼・筋機能と呼吸機能の調和
術後に生じた気道変化の比較検討

あとがき
著者略歴

※内容については一部変更が生じる場合があります。

「口腔機能との調和に配慮した矯正歯科治療」申込書

氏　名	
医院名（大学名）	電話（　　）　　―
住　所 お届け先	